The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『古文孝経孔氏伝』偽作説について
Author(s)	佐野, 大介
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2000, 34, p. 29-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6616
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『古文孝経孔氏伝』偽作説について

佐野大介

『古文孝経孔氏伝』（以下、『孔伝』と略称）は、孔子壁中書である古文孝経に孔安国が伝を附したもの、とされている。しかし、現行の『孔伝』は二度の亡佚を経たものであり、[1] そのため、従来さまざまな『孔伝』偽書説が提出されてきた。そこで、本稿では『孔伝』研究の基礎作業として、『孔伝』偽書説についての先行研究に考察を加え、その成書年代について考えたい。[2]

一　『孔伝』偽作説概観

現行本『孔伝』はその流伝が複雑であり、数多くの偽書説がある。ここに並べてみると、『漢書』芸文志に記載された「孝経古孔氏一篇」自体が後人の孔安国に仮託した偽撰であったとする説、梁の乱に亡びて後、隋代に出現したものが偽撰であったとする説、さらに再度の亡佚の後、日本より逆輸入されたものが日本人の偽撰であったとする説、の三種となる。[3] 更に、一度偽撰された後、亡佚を経て、再度偽撰された可能性も指摘されている。『孔伝』偽撰期についての説は数多く存在するが、管見の及ぶ限りでは、五種に大別できる。以下、本章では、それらを偽撰

期として比定された出現期の年代順に紹介する。

なお、便宜上、本稿においては『漢書』芸文志の記述より存在が予想されるものを「芸文志本」、隋代に出現したものを「劉炫本」、日本より逆輸入されたものを「太宰本」と称することとする。

偽作説の第一は、芸文志本自体に対する偽作説である。これは、もともと『漢書』芸文志の「孝経古孔氏一篇、二十二章」との記述が、孔安国の伝を示すものではない、との見解である。

清の康有為は、『新学偽経考』において次のように述べる。

> 這書自身（引用者注……『古文孝経孔伝』）既に是れ偽書なり。而して偽中又た偽有り。偽本最も多く、他経に過ぐ。第一次偽古文本、漢の劉炫に出づ。第二次偽古文本、隋の劉炫に出づ。第三次偽古文本、日本の太宰純に出づ。（「重論経今古文学問題」『新学偽経考』）

康有為は、芸文志本を劉歆の偽撰とし、三度の出現期全てに別個の偽撰者を想定している。(4) ただし、「是偽書」との結論を述べるのみで、論証過程は示されていない。この点から、楊家駱氏は、「康有為は、『新学偽経考』を撰して、『古文孝経』を劉歆の偽作と考えているが、無実の罪をきせること甚だしく、冷静な論ではないので、採用しない。」（「清代孝経学考（上）」『学粋』三―一　一九六〇年）として、この説を否定している。

第二・第三として、劉炫本に対する王肅偽作説・六朝人偽作説がある。清の丁晏は、『孝経徴文』所載の「日本古文孝経孔伝弁偽」において、『孔伝』の説と王肅の説とが一致するものを五つを挙げ、

是れに由りて之を観るに、其の粛の妄作為るや、豈に昭昭然ならざらんや。夫れ、『孔伝』と古文と合わざるもの五、其の真古文に非ざるを断ず可し。王粛と宛合するもの五、又其の粛の偽撰為るを断ず可し。

とする。また、清の盛大士は、『孝経徴文』序において、次のように述べる。

安国の伝を作るや、漢人は言わず、独り『家語』のみ之を言う。『家語』、王粛が偽撰為り。而して安国の『孝経』に注するや、『家語』と暗合する者有り。『隋志』載す所の王粛が『孝経解』久しう佚われ、今、邢昺疏中に見ゆ。而して多く『孔伝』と相同じ。是れ必ず王粛妄りに作り、孔氏に仮称し、以て己の臆見と互いに相い援証せしむるならん。……或るひと遂に炫の作為るを疑う。而れども、劉炫の王劭に得しを知らず。劭と炫と或いは皆王粛に欺かれしか。

として、劉炫偽作説を否定し、王粛偽作説を提唱している。これらの説は、邢疏に引かれる王粛の『孝経解』の説と『孔伝』の説とが符合すること、『孔伝』を孔安国の作であるとした最も古いとされる文献である『孔子家語』が王粛の偽撰であること、の二点を論拠としたものである。

これらの論拠を考えるに、孔安国に『孝経』の伝があったとの証左となる最も古い文献は、『孔子家語』の後序の、「孔安国乃ち古今の文字を考論し、衆師の義を撰し、古文『論語訓』二十一篇・『孝経伝』二篇・『尚書伝』五十八篇を為る。皆壁中の科斗本より得し所なり。」とする部分である。しかし、盛大士の言うように、『孔子家語』王粛偽作説が提唱されている以上、この記述が王粛の手になる可能性がある。即ち、この記述を以て、直ちに孔安国

の『孔伝』作成の論拠とするには問題が残る。

ただ、邢疏引『孝經解』と『孔伝』との一致に関して、林秀一氏は、「しかし邢昺の「孝経正義」に引用する王粛の「孝経解」十三条中、孔伝とほぼ一致するものは、わずかに四条に過ぎないから、これを以てただちに王粛その人の偽託と断定した丁晏の見解は、臆断と考えざるを得ない。」（「孝経孔伝の成立について」『孝経学論攷』第六高等学校中国文化研究室油印　一九四九年　後に『孝経学論集』明治書院　一九七六年）として、「魏晋以後、恐らく六朝の人が、孔安国の名に託して偽作したもの」と結論づけている。

第四として、劉炫本に対する劉炫偽作説がある。最も早くにこの説に言及したものとしては、『隋書』経籍志（以後、『隋志』と略称）がある。

隋に至りて、秘書監王劭京師に『孔伝』を訪得し、送りて河間の劉炫に至る。炫因りて其の得喪を序し、其の議疏を述べ、人間に講じ、漸く朝廷に聞こゆ。後、遂に令を著し、鄭氏と並び立てしむ。儒者諠諠として、皆炫の自ら之を作り、孔の旧本に非ずして、而して秘府又先に其の書無きを云う。（『隋書』経籍一　経　孝経）

ここで、『隋志』は、「儒者諠諠皆云」として慎重な態度を示し乍らも、孔安国に『孝経』の伝があったことを認めた上で、隋代に出た『孔伝』は劉炫が偽撰したものである、という意見を載せる。なお、劉炫には『連山易』や『魯史記』を偽撰した経歴がある。「かかる人たちの手から出た孔伝の怪しいことはもちろんである。」（「孝経の研究」『武内義雄全集』第二巻　角川書店　一九七八年）とされる所以である。

また、明の鄭瑗『井観瑣言』及び『四庫全書総目提要』（以下、『四庫提要』と略称）なども同様の見解を採る。

第五として、太宰本に対する日本人偽作説がある。

清の鄭珍は、「弁日本国古文孝経孔氏伝之偽」の中で、太宰本の偽撰たる十条の論拠を挙げ、次のように結論づける。

是書を作る者、彼の窮島僻奥の一空腐の人にして、前籍を見、『孔伝』を称引するを知る。中土に久しう其の書無し。漫りに事とし粗く捃い、自ら絶学を詡り、以て其の国の秘蔵に富むを輝かさんとするのみ。

太宰本が日本人の偽撰である、との見解である。ただ、鄭珍は「隋の劉炫始めて『孝経孔氏伝』を偽作し、『今文鄭注』と並び学官に列せらる。」ともしており、劉炫が一旦劉炫本を偽撰し、それが彼土にて亡佚した後、我邦にて太宰本が偽撰されたと考えているようである。また、『四庫提要』・丁晏『孝経徴文』も同様の見解を採る。

以上、五種の『孔伝』偽作説を概述した。

二　『孔伝』偽作説研究の現況

こういった状況の中で、胡平生氏の「日本《古文孝経》孔伝的真偽問題――経学史上一件積案的清理――」が発表された。この論考は、林氏前掲論文をふまえて、『孔伝』の成立について論じたものである。氏は、論文終章に於いて、己の論文の結論を三点にまとめている。

第一の結論は、字句の異同から、太宰本が底本としたのが足利本であったと結論づけ、足利本が隋唐時代の俗字

を使用しているところから、足利本系統の祖本が隋唐時代に書写されたものとしたものである、とする。また、ここから、足利本が劉炫本系統であることも推測している。

第二の結論は、トルファンより発掘された康本『孝経』の経の字句が、他系統の今文本よりも、足利本の経と一致する傾向にある、とし、康本の書写されたのが劉炫より早いことから、劉炫本の経は劉炫の偽撰ではない、とする。(5)

第三の結論は、劉炫『孝経述議』が、『孔伝』の記述に反することを述べているから、『孔伝』は劉炫の偽撰ではない、とするものである。

また、胡氏は、王肅偽作説にも反論を呈しており、『孝経徴文』言うところの『王氏解』と『孔伝』との一致から王肅を偽作者とすることに対しては、「証拠が全く不十分」とする。また、『孔子家語』の後序に『孔伝』の存在が記されていることに関しても、定県漢簡や阜陽漢簡に『孔子家語』と類似する文章が見受けられることを指摘して、「出土資料に『孔子家語』に似たものがあるから『家語』偽作説は軽々しく信じるべきではない。」としている。

以上、胡氏の説によると、先に挙げた五つの『孔伝』偽作説の内、三者が否定される。つまり、太宰本は日本人の偽撰でなく、劉炫本系統である。そうして、劉炫本は劉炫の偽撰ではない。さらに、「伝」は王肅の偽撰でもない。こうして、太宰本の祖本は、劉炫以前かつ王肅以外の撰である、とまとめられる。

では、胡氏は一体誰が『孔伝』を作ったと考えているのかというと、「当然、『古文孝経』孔伝の文体・文気は、早く西漢とするには問題がある。これはまだ、一歩深く研究を進める必要がある。」として結論を留保しており、作者を特定していない。

『孔伝』偽書説に関する最新の見解を提出する胡氏論考であるが、その結論には疑問も残る。第一の結論部において、胡氏は、太宰本の底本を足利本とし、その根拠を二つ挙げる。一つは、太宰と同窓の山井鼎が足利本を「頗佳」と評していることである。もう一つは、足利本を含む他の日本写本が聖治章の「以養父母曰厳」部の「曰」字を「曰」字に作っているのに対し、太宰本は「日」に作っているが、足利本のみ「曰」字の字体が長く、「日」に見え得ることである。つまり、太宰は他の日本写本ではなく、足利本を底本としたため「曰」字を「日」字と見て、太宰本で「日」字に作った、と考えられることである。しかし、林氏は、「太宰純の孝経孔伝の校刊とその影響」(『岡山大学法文学部学術紀要』二　一九四八年　後に『孝経学論集』明治書院　一九七六年)において、足利本が太宰本を始め、その他すべての本と一致しない部分が五十三条あり、足利本が太宰本とのみ一致し、その他のすべての本と異なる部分が二条あることを確認した上で、太宰本が底本としたのは足利本ではなかった、と結論づけている。胡氏が、このただ一条だけの太宰本と足利本との一致、それも、「曰」が「日」に見える、という点からのみ太宰本の底本を足利本と結論づけることはかなり難しい。さらに、太宰本の底本を足利本であると仮定したとしても、俗字の使用のみから、足利本の祖本が隋唐時代の書写に出ると結論づけるのは根拠が薄弱であろう。

第二の結論部では、トルファン出土本が断片であるため、『孝経』本文全体の比較は行い得ず、胡氏の結論には資料的制約の下での限定されたものと言わざるを得ない。更に、劉炫は当時一代の学者であり、よしんば彼が偽撰したとしても、諸書の引く『古文孝経』を輯佚する形で行ったであろうことは疑いなく、経の一部が一致するからといって、一概に経を劉炫が偽撰したとの説を否定する根拠とはなるまい。

第三の結論は説得力があり、伝については劉炫偽作説を否定する大きな力となると思われる。

なお、王肅偽作説に対する胡氏の見解は、出土資料が一つの大きな論拠となっている。この出土資料とは、定県四〇号漢墓出土の『儒家者言』を指していると思われる。(6) 何直剛氏は、「《儒家者言》略説」(『文物』一九八一年第八期)において、『儒家者言』の句の内、『孔子家語』と一致するものが十章、『説苑』と一致するものが十六章あることを指摘している。この一致箇所を、定県漢墓竹簡整理組「《儒家者言》釈文」(『文物』一九八一年第八期)に依って確認してみると、『孔子家語』との一致箇所は、全て『説苑』との一致箇所に内包されている。

そこで、この『孔子家語』・『説苑』・『儒家者言』の前後関係について考えてみる。『儒家者言』は著者も成立時期も明らかでない。『孔子家語』には偽作説があり、成立年代が確定されていない。また、『説苑』は劉向の手に出るものであるが、その素材となる記事は劉向以前より存在したと考えるのが妥当である。よって、『説苑』の素材の成立時期も明らかとはならない。以上より、現時点でこの三者の先後関係は比定し得ない。また、『儒家者言』に『孔子家語』と一致する文章がみられるとしても、『孔子家語』よりの引用であると明記したものでない以上、王肅がこれら『儒家者言』を利用して『孔子家語』を偽撰した可能性も排除出来ない。つまり、素材が出土したからといって、『孔子家語』が王肅以前から存在した真本であると証明したことにはならないと言える。

以上、本章では胡氏の新説を紹介し、若干の批判を試みた。その結果、劉炫偽作説への批判は妥当と思われるが、王肅・太宰偽作説に関しての胡氏の見解には疑問が残ると考えられる。

三　太宰本の出現期

ここでは、胡氏とは別の角度から、太宰本が日本人の偽撰であるのかどうか、について考えてみたい。

上に挙げた偽作説の内、林氏・胡氏を除く全てが「太宰本は日本人の偽作である」との見解であるが、論証過程を示さず、日本人が偽撰したとの結論のみを述べるに止まるものが殆どである。

そこで、管見の及ぶ限りでは、唯一実証過程を示している鄭珍の説について検討する。

まず、鄭珍は、劉炫本は劉炫の偽撰、太宰本は日本人による偽撰、という二段構えの偽作説を採るため、十条の論証の内の八条が、結果的に太宰本の偽撰たるを述べているにせよ、実際には偽撰者を特定する役割は果たしておらず、偽撰時期が劉炫本編集期であれ太宰本編集期であれ当てはまる行論となっている。そこで、日本人偽作説のみを論証していると考えられる二条（「其偽一」・「其偽四」）について検討する。

劉炫既に孔氏注本を撰し、別に『古文稽疑』一篇を作り、之を明らかにす。又、『義疏』三巻を作る。書皆伝わらざれども、要は、孔氏を主とし、鄭氏を駮す。両漢以来、並びに謂えらく、『孝経』は、孔子曾子と孝道を陳ぶ、と。独り劉炫のみ謂えらく、「孔子自ら作り、特に曾子の言に仮し、以て対揚の体を為す。並びに曾子業を請い、対するに因るに非ず。」と。是れ、『偽孔伝』を撰する所の大端なり。今、『孔序』乃ち云えらく、「曾子匹夫の孝を躬行するも、未だ天子諸侯に達せず。下の事を以て、因りて侍坐諮問し、夫子其の義を告ぐ。遂に之を集録して、名づけて『孝経』と曰う。」と。則ち、炫が説と応ぜず。其の偽の一なり。（「弁日本国古文孝経孔氏伝之偽」『巣経巣文集』）

これは、『孔序』が『孝経』を孔子と曾子との問答を集録したもの、とするのに対して、劉炫が孔子の著作と考えるという点を突いたもので、『孔序』の説が劉炫の立場と異なること、即ち劉炫ではなく日本人の偽撰たるを証した

ものといえる。

ここで前提とされているのは、劉炫が、「孔氏を主とし、鄭氏を駮す。」筈が、却って『孔伝』に反することを述べているという事である。しかし、清の毛奇齢『孝経問』は、『正義』が引く劉炫注を挙げ、「且つ、炫『孝経』を講ずるに、孔・鄭並びに講ずと雖も、翻って孔を遵ばずして鄭を遵び、今文を講じて古文を講ぜず。」としている。ここから、劉炫が今文だけを講じていたかはともかく、古文のみを尊重してその説に従ったのではないことが推察される。

また、林氏が『孝経述議』を復原してより、劉炫の『述議』が必ずしも『孔伝』の説に忠実に祖述したものではなく、時に『孔伝』に反する説を主張していることが確認されている。(7) よって、劉炫の説と『孔伝』の説とが食い違うことは、『孔伝』が劉炫の偽撰でないことのみは証明し得るが、『孔伝』が劉炫の後（太宰本編集期）に偽撰されたことの証明とはなっていない。

また、鄭珍は、「其偽四」で以下の様に述べる。

鄭氏「孝始於事親」三句に注して云えらく、「父母之を生む。是れ親に事うるを始と為す。四十強にして而して仕う。是れ、君に事うるを中と為す。七十にして致仕すとは、是れ、身を立つを終と為す。」と。劉炫駮するの文、具に『邢疏』に載す。是れ、必ず『偽孔伝』鄭と義を異にせん。乃ち持して以て鄭氏を難ぜん。今、『伝』の此の三句を解するは、正に鄭が義と同じ。其の偽四なり。（「弁日本国古文孝経孔氏伝之偽」『巣経巣文集』）

ここでは、『邢疏』に引用される劉炫『孝経述議』が、『孝経鄭氏注』に対して反駁しているにもかかわらず、太

宰本『孔伝』が『孝経鄭氏注』と同様の解を為していたことを指摘する。つまり、前の例と同様に、劉炫の説と食い違いがあるから、太宰本は劉炫の偽撰ではなく日本人の偽撰である、という論理となる。

しかし、『孝経述議』には、『邢疏』の引用した句の前に、「此の始・中・終の義、徒に孔此の説を為すに非ず。先儒尽く然り。其の言、経旨に非ざるなり。」とあり、『孔伝』にこの「始・中・終の義」との説があったことを明記している。さらに、この部分は『孝経鄭氏注』ではなく、先儒の説に従う『孔伝』に対する反論となっている。つまり、劉炫は『孝経鄭氏注』の説が『孔伝』の説と異なっているからこの様な説を立てた訳ではなく、『孔伝』の説に反論しているのである。前述の通り、『孝経述議』には『孔伝』に反論する箇所があることが確認されており、当条で『孔伝』に対して反論している以上、これも劉炫以後の偽撰たることを証明していることにはならない。

以上より、太宰本が太宰の偽撰とは断定出来ないといえる。また、清朝の研究者は、日本に「相当数の古写本が残っている」(武内氏前掲論文)ことを知らずに立論せざるを得なかったため、太宰本が突如出現したものと考え、多分に主観を交えた日本人偽作説に傾いたと考えられる。

ここまでで、劉炫偽作説・太宰偽作説の双方が否定された。そこで、劉炫本の祖本の出現期が問題となるが、これは、偽古文『尚書』の『偽孔伝』との関連から、ある程度の推測が可能である。『孝経』天子章第二において、「『呂刑』云、一人有慶、兆民頼之。」との『尚書』引用部に対する『孔伝』が、「言、天子有善徳、兆民頼其福。」とするのに対して、偽古文『尚書』の『偽孔伝』は「天子有善、則兆民頼之。」とする。この点、加賀栄治氏が、「この孝経孔伝は、明らかに尚書孔伝にもとづいて、しかも一々疏解している……」(『中国古典解釈史　魏晋篇』勁草書房一九六四年)と指摘するように、明らかな関連が見られる。ただ、加賀氏は言及していないが、偽古文『尚書』が

梅賾の偽撰たることは学界の定説であるから、ここで偽古文『尚書』の『孔伝』と『古文孝経』の『孔伝』との前後関係が問題となる。このことについて、武内氏は、日本に現存する最古の『孝経』である三千院本の『孝経』に隷古定の文字が残っていることを指摘し、「しかしそのことは、それが前漢に壁中から掘り出された古文孝経であることを証明するものでなく、むしろ古文尚書に真似て作られたことを証するもので、古文尚書がすでに魏・晋の偽作であるとすれば、これによって古文孝経もまたそれ以後の偽作なることを示していると見るべきである。」（武内氏前掲論文）としている。

これらより考えるに、劉炫本『孔伝』の祖本の出現時期は、偽古文『尚書』の『偽孔伝』が出現した東晋の元帝期以後、かつ、『孔伝』が学官に立てられた梁以前という可能性が高いと思われる。

小　結

我邦に残る『孔伝』古抄本は相当数に登り、太宰本はそれらを参照し、まとめられたもので、太宰の偽撰ではない。我邦に残る古抄本が全て太宰以前の偽撰である可能性は極めて低いと考えられる。また、林氏・胡氏により劉炫偽作説も退けられた。その上で、偽古文『尚書』の『偽孔伝』との関係から、『孔伝』の出現期は一応東晋の元帝期以後・梁以前の六朝期と考えてよいであろう。

今後は上記の結論のもと、従来あまり省みられなかった『孔伝』の思想内容に関する考察を進めたい。

注

（1）以上の記述は、『隋書』経籍志・『経典釈文』序録・『四庫全書総目提要』経部孝経類等の記述を参考にした。

（2）『孔伝』の成立に関する専論としては、丁晏「日本古文孝経孔伝弁偽」（『皇清経解続編』所収）・鄭珍「弁日本国古文孝経孔氏伝之偽」（『巣経巣文集』所収）・林秀一「孝経孔伝の成立について」（『孝経学論攷』第六高等学校中国文化研究室油印　一九四九年　後に『孝経学論集』明治書院　一九七六年）・胡平生「日本《古文孝経》孔伝的真偽問題――経学史上一件積案的清理――」（『文史』二十三　一九八七年）等がある。

（3）林氏前掲論文・楊家駱氏「清代孝経学考（上）」（『学粋』三―一　一九六〇年）参照。

（4）「漢書芸文志弁偽」第三下（『新学偽経考』）にも同様の論がある。

（5）胡氏は、康本巻末に「和平二年康豊国写」とあることから、「和平」を麴氏高昌の年号として、西暦五五二年と比定している。

（6）一九七三年に定県八角廊四〇号西漢晩期墓（前漢中山王懐王劉脩墓）より出土した典籍の一つ。懐王は紀元前五五年に死亡しているため、副葬品はそれ以前の抄本となる。なお、『儒家者言』との名称は、定県漢墓竹簡整理組が名付けたものである。

（7）林氏前掲論文に詳しい。

（大学院後期課程学生）